

実践報告(Report)

能楽囃子の義務教育課程音楽課程での 単元化のための教材試作

——《松風》破之舞の楽譜化と分析から——

Trying to make a teaching material of Noh performance
musical accompaniment in music classes of the compulsory
education

渡邊 康*
WATANABE, Koh*
飯塚 恵理人**
IZUKA, Erito**

キーワード：能楽囃子（のうがくはやし）、楽譜化、単元化

Key words : Noh performance musical accompaniment, making a score, teaching material

はじめに

現在の中学校の音楽の学習指導要領には、日本の伝統音楽を鑑賞教材としてばかりでなく、歌唱指導・器楽指導においても中学校三年間で一種類以上を取り上げるように記されている（文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/on.htm 2017年12月22日閲覧可能）。以下に引用する。

- (2) 器楽の指導については、指導上の必要に応じて和楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器及び世界の諸民族の楽器を適宜用いること。なお、和楽器の指導については、3 学年間を通じて 1 種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。
- (3) 我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。

同ホームページには日本の伝統的な歌唱（民謡・長唄等）や和楽器を指導する際の留意点として、歌唱は「伝統的な声の特徴を感じ取れるもの」とし、器楽は「表現活動を通して、我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができる」工夫をすることを挙げている。しかし伝統音楽の譜面の読譜については特に書かれていない。読譜そのものについては「3 学年間を通じて、1 シャープ、1 フラット程度をもった調号の楽譜の視唱や視奏に慣れさせるようにすること。」と、小学校音楽課程での学習内容を踏まえ、西洋式の五線譜を読む学習についてのみ記されている。日本伝統音楽の楽譜はジャンル・流儀により統一されておらず、それぞれ記譜方法に独特のものがあるため個々に指導せざるを得ない。これでは時間・教材に限りのある中学校現場では実施が難しい。伝統音楽の譜面が、楽器のジャンル・流儀によらずすべて生徒達が小学校

* 椋山女学園大学教育学部

** 椋山女学園大学文化情報学部

で学んできた西洋式の譜面であったならば、読譜が容易になり演奏も西洋音楽との比較もやりやすくなるだろう。

渡邊・飯塚は、能楽囃子を中学校の音楽授業の単元として取り上げるために、囃子の五線譜による楽譜化に取り組んできた。本年度は、観世流シテ方観世喜正師が舞われた能《松風》(第8回喜正の会)の映像を御提供戴けたので、その中から「破之舞」の部分の楽譜化を行った。破之舞は《松風》の終曲部に近い部分で、松風・村雨の姉妹の亡霊が在原行平への思慕の情の余り、狂気をはらみながら松を行平に見立てて舞う部分である。短いので、単元化にも適した教材であると考えられる。音楽としての特徴の解説と楽譜化は渡邊が担当し、次章に示した(以上、飯塚)。

平成29年度3月告示の新小学校学習指導要領における邦楽指導との関連

小学校の新指導要領においても、和楽器や邦楽に関する言及がなされている。小学校学習指導要領各教科第6節音楽(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm 2017年12月22日閲覧可能)では、第3学年及び第4学年の「B鑑賞(2)鑑賞」では次に示すものを取り扱う。「ア 和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」とある。さらに「(1) イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴くこと。」と定められている。また「A表現(3)」では「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。」とありこれらの指導目標を満たすために、今回の破之舞は教材として適切であると考えられる(以上、渡邊)。

《松風》破之舞の楽譜化と分析

笛の旋律を中心にその楽曲構造を明らかにする。曲本体は8小節目から終曲までの8小節の大楽節が3回繰り返される3部形式A-A'-A''である。動機構造は、1小節目単位の部分動機の連なりで、2小節1動機の単位で進行する西洋音楽と共通な楽節構造である。しかしその部分動機は明らかな差異があるのではなくほとんど同一であるが細かく変化が加えられるものである。ここに能楽囃子のはっきりとした特徴がある。西洋音楽では同一の動機が正確に繰り返され、あるいは明確な変奏方法によって変化されることによって構成されることが基本となるが、ここでは、基本的な少数の動機(この曲では、aとb)が微妙な変化を常に加えながら繰り返されるという単純さと複雑さを両立させる特徴がある。分析では部分動機a、bとその派生動機としてa'a''などとし、aまたはbのどちらかの部分動機に収束させた(以上、渡邊)。

囃子の構成原理を理解する：小学校・中学校教科音楽への教材として

能楽囃子においては拍節構造が曖昧で拍子が感じられないものが多いが、この曲で

はその点で西洋音楽と共通の基本的な構成要素を持つものであるので、拍節を明確に感じられるため小学校・中学校の教材として適切であると考えられる。

さらに前述の音楽の仕組みを活かし音楽をつくるという視点でもこの教材は有効である。示した楽譜でも明らかになっているが、正確に同じ動機が再現されることはない。非常に複雑で微妙な変化が常に加えられている。これを集団授業で短時間のうちに扱うことは不可能である。しかし前述の基本となる部分動機を西洋音楽の変奏の原則に従って少し変化させて組み合わせる手法をとることで、その構成原理を理解することが可能になるであろう。例えばリコーダーで基本である部分動機 a と b を練習し、次にその a, b を生徒に微妙に変化させるように指導することで全体を構成し、作曲演奏することができる。そのための教材楽譜を試作した。

破之舞 教材試作



リコーダーで演奏可能になるように、笛の細かい動きを簡略した旋律としている。もちろん改変した教材楽譜はもはや能楽囃子ではないが、このことにより能楽囃子の構成原理を理解して、曲想の性格と変化の仕方を感じることができると予想できる。つまり和楽器や邦楽についてその構造の一端を学び、実際に作曲して演奏し音楽の表現原理を理解することができる。伝統的な笛の練習では、唱歌を基に指導者と学習者が一対一で面会するので細かい指導が可能であるが、時間が限られた学校授業での囃子の理解には、このような西洋音楽の楽譜の導入による概念の理解がスムーズであろう。(以上、渡邊)

謝 辞

貴重な映像を提供頂きました観世流シテ方観世喜正先生に心より感謝致します。本稿は平成29年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」(研究代表者：飯塚恵理人，課題番号：17K02432)による成果の一部となります。

《松風》破之舞

Lento *8va*

ヨオ ヨー オー ホ イヤー ホ
ヨー オー イヤー オー オー イヤー オー

Allegro *accel.* **大楽節A** *a'*

イヤ ハ ハ イヤ ハ イヤ ハ ハ イヤ ハ

Vivace *a* *a'*

イヤ ハ ハ ヤ ハ イヤ ハ ハ ヤ ハ

b **ブリッジ**

ヨー ホ ホ ヨー オオ ヨー

大楽節A'
Allegro

17 *rit.* *a* *b'* 3

17 ヨー ヨー

ヤ ハ ヨ イヨ イヤ

Vivace *a''* *a*

21 3 3 *accel.* 3 ヨー

21 ヨ オ

イヤ イヤ ヤ ハ

大楽節A'' *a'''* *b*

25 3

25 ヨー

イヤ ハ イヤ ハ

Adagio 終止 *a'''*

29 3 *molto rit.* 3

29 オ ヨー イヨ

イヤ